

『物流 Weekly』連載原稿

「日本ロジファクトリーの物流ケース・スタディー」第2回

<タイトル> 協力的な会社を減車するか？

<本文>

我々はまず、売上高も少なく、配送回数も少ない配送先を大手路線便に振り替えた。結果は当然、「物流コストの増大」である。なぜかと言えば、これまでチャーター便で配送を行っていたものの一部を路線便に振り替えただけだからである。チャーター便の減車を行わなければ、チャーター便の積載量が薄まっただけになり、路線便へ振り替えた分がコスト増となる。

しかし、我々は焦ってはいなかった。それは、2 - 3台の減車の目処は立っていたし、それを実行することによって、コスト増になった分もすぐに取り返せるだけのコスト削減を見込めていたからである。が、そこでこれまでのその重い口をあまり開かなかった配車担当が口を開いた。「このままだとA運送の車両が減車されることになるけど、配車しているのはK社なわけだから、A運送には何の罪もないはずですよ」「A運送さんは他の運送会社が嫌がるような非効率なルートや配送先を運んでくれるなど非常に協力的です」「A運送を減車して配車組することは、他の物流業が非協力的なだけに困難が予想できます」「得意先からのドライバーの評判も非常に良いし、配車担当としてはA運送のドライバーが減少することはサービスの的にマイナスになると思います」

「A運送以外のドライバーは得意先からのクレームも多いしA運送のドライバーの代わりにルートから外したいドライバーはいるなあとのことだった。

(次週に続く)